

Q.

獣みたいな怒鳴り声で喚き続けるミルクに三千五百円のファンヒーターを投げつけたあと、スロクはアパートを飛び出した。二キロほどの機械は彼女の太腿をかすり、派手な音をたてて窓硝子を突き破った。年の瀬には致命的な事態だ。さつさとガラス片の後始末をして修理屋に連絡しなければならない。

業者と自分、そしてミルクが同じ部屋に居る光景を想像しただけで怖気が走った。自らが犯した悪行を掘り返されて、裁判にでもかけられているような気分になるに違いない。前回同じ目に遭ったのはテレビの液晶を割ったときだった。その際の凶器は必死に首を振っていた二千八百円の扇風機だったから、半年ばかりは悶着を起さなかったことになる。しかし三十三歳の男が半年間、むずかるのを我慢したからといって誰も褒めてはくれない。あまつさえ、そのあいだも数えるのが面倒なほどミルクに手を上げている。

一晚、時間を置けば彼女は今回も許してくれるだろう。それでも『許される』という手続きを踏まされること自体が、スロクにとつては堪えきれない屈辱だった。しかし、だからといって割ったままにしておくわけにもいかない。寒風の吹き荒ぶりビンゴでは酒を飲む気にもなれず、歯の根も合わないまま耐え忍ぶ羽目になる。長々と放置していれば大家だって文句をつけてくるだろう。面倒ごとが膨らんでいくばかりだ。

アスファルトをそぞろに進んで居宅から逃げ惑う。右手でダウンジャケットのポケットの財布を探り当て、左手で首筋を掻きむしり、靄がかかった息を一気に吐いた。怒りはファンヒーターを投げようと振りかぶった瞬間に絶頂へ達したあと、急速にしぼんでいった。今はむしろ小動物みたいに縮こまった気分だ。どうして毎度、取り返しのつかない行為に手を出してしまうのだろうか。今更考えたって、キレているときの自分の心情なんてわかるわけがない。癩癩と性欲はよく似ている――少なくとも、スロクにとつてはそうだ。

近場のコンビニで常温のカップ酒を二つと煙草を求めた。冬場に持ち歩くには角瓶は大きすぎるし、アルミ缶は冷たすぎる。

カップ酒の蓋を開けてそこいらに放り投げ、一気に呷る。視線の先にオリオン座が見える。神話でのオリオンは優秀な狩人だったが、力を過信して驕り高ぶったせいで神の怒りを買

い、サソリを放たれて毒殺されたい。以来夏にのぼってくるサソリ座から逃げ続けているそうだ。いつだったか、ミルキに教えてもらった雑学だ。排ガスとネオンライトにまみれている街の夜空で全貌を観測できる星座は、明るい星の多いオリオン座ぐらいのものだろう。

「人は星の数ほどいるっていうけどさ、実際に出会える人なんて都会から見える星の数ぐらいだよ」

そのときは甘かった彼女の声を振り払うため、早足で街路を進みながら煙草に火をつけた。今日こそはいよいよ、本腰を入れて『福祉』を探し当てようか、と思い立つ。

『福祉』の存在はイツカクから聞かされた。小学校からの旧友であり、同時に悪友でもある男だ。精神薬でスニッフする方法を覚えてくれたのも、後腐れなく女を犯せるよう手ほどきをしてくれたのも彼だった。多くの悪事において、彼はスロクの先達だった。だからスロクはイツカクを、尊敬すらしていたのだ。

しかし彼は既に脱法の世界から足を洗ってしまっていた。今では介護の資格を取って特別養護老人ホームで働いている。

「八十を超えたボケジジイにぶん殴られるわけだ」百九十九円でビールが飲める居酒屋で、彼はシャツの袖をまくって二の腕についたグロテスクな痣を見せつけ、歯を剥いて笑った。「ヤッあ日があ一日、施設の中を歩き回って、たまに風呂だなんだで身体を触ると、ぶっ壊す勢いでド突いてくるんだな。加減を知らないんじゃないかって加減を忘れてんだから、手のつけようがないわな」

スロクは、その場ではイツカクの不遇に憐れみを、見知らぬ老翁に義憤を示してみせた。しかし心底では、この男はどうしてこんな風になってしまったのだろう、という失望じみた疑問が渦巻いていた。ぶん殴られてすら二十万にも満たない賃金しかもらえない仕事なのか、俺だったら絶対にやってられない。殴り返して罪になるんだったら、とっとと死んでしまった方がいくらかマシだ。以前のイツカクは、そんなみじめな身分に落ちぶれる一般人ではなかった。彼はかつて、明らかにスロクと同じ側の人間だったのだ。いったい何が彼を、このように変えてしまったのだろう。

やはり刑務所での経験が効いているのだろうか。イツカクは三年前、運送の仕事で使っていたトラックを学校帰りの女子高生にぶつけ、一年半ほど懲役に服した。危険運転致死傷とやらで実刑がつくというのは相当に厳しい判決だったらしい。よほど現場での対応が悪か

ったか、もしかしたら前科の幾つかが暴かれた結果なのかもしれない。いずれ、スロクにとってはどうでもいいことだ。

それよりも、地方新聞やネットの記事で本名を報道されたのが最悪だった。イツカクが逮捕されたというニュースはSNSなんかを通じて瞬く間に拡散され、彼は人間関係の大半を一度に失った。本人によればスロクだけが唯一、彼から離れなかったのだという。強姦や殺人をやらかしたわけでもない、まして自分が被害者であるわけでもないのに何を気にする必要があるのか、スロクにはわからなかった。しかし、どうやらともに人生を進めている場合、人間は世間体というものを相互監視し始めるらしく、それは交友関係にも及ぶらしい。

服役を契機に、イツカクはそれまでの居場所を放棄し、地元から遙かに距離を置いた地方都市へ引っ越して正社員になり、日々身を砕くようになった。別にそうする必要はなかったように思う。そもそも彼が属していたコミュニティは決して清廉潔白ではなかったし、なんならその伝手を頼って故郷にしがみつく方法だっていくらでもあったはずだ。どういう発想が彼を駆り立てたのか、未だ確たる答えは聞き出せていない。

一つ飲み干しても身体は温まらず、代わりに烈しい鼓動と吐き気が襲った。そこいらの電柱に寄りかかって内臓を落ち着けてから二つ目を開ける。身体が意思から遊離している感覚に陥るが、どうやら勝手にアパートから遠ざかってくれるようだ。大胆な歩調で前進する。

スロクが目指す『福祉』は一般に知られている福祉ではないし、ましてイツカクが働いているような高齢者施設を指すようなものでもない。

「つまりさ、この世には真に弱者を救う極楽があるんだよな」数ヶ月前、二桁目のハイポールを握りしめたイツカクに、熱く言っただけで聞かされたのだ「弱者つうのはさ、要するに皆がなりたいがる身分じゃないはずなんだな。今のご時世じゃあその席を大勢が取り合っている風潮もあるが、しかしね、誰もが弱者の椅子を厭うようになったら、そこにおさまるのは、結局、加害者ということになっちゃうんだよ。そうしたら、その椅子こそが『福祉』と呼ばれて然るべき場所さ」

スロクには彼の言っていることの一割も理解できなかった。ただただ、自分のような人間にも楽園のような行き場が用意されているという風にだけ捉えたのだった。生まれつき、加害性を纏った人間だった。言い負かされるが、殴り勝つ人間だった。頭の足りなさを、腕っ

ぶしと無鉄砲さで補う人間だった。そのような者でさえ、『福祉』は救うのだ、という風に。

スロクの両親は特段にエリートの出身というわけではなかったし、一人息子に潤沢な教育資金を割けるほどの財力があつたわけでもなかったが、それでも親という生き物は子どもに、そろそろらしい希望を託すものだ。だから、小学三年になつても平仮名の読み書きができないと担任教師に告げられたとき、彼らは相当に動揺した。方々の医者に息子を連れて行き、何か病気がないか執拗に検査を受けさせた。貯蓄も知識もない二人がヤケを起こして虐待やネグレクトに走らないためにも、それは回復不可能な障害ではなく、標準医療で治療できる症状でなければならなかった。

当時の記憶は、医者嫌いという形でスロクの身に刻まれている。幸か不幸か脳にさしたる異常はなく、少々の学習の遅滞は時間が解決するだろう、というのが医者の見立てで、両親は大いに安堵した。程なくして読み書きも九九も問題なくこなせるようになったが、成績が底辺なのはいつまでも変わらなかった。試験で名前を書けば誰でも入学できる高校までは進めたが、大学は最初から意識にのぼりすらしなかった。中三あたりから、何を教えられていたかさっぱり憶えていない。いつだってスロクが憶えられるのは通知表に関係のないことばかりだった。たとえば、オリオン座の雑学のように。

卒業してすぐ倉庫作業の仕事に就き、居丈高な先輩に刃向かって二ヶ月で辞めた。以降も工場やスーパーなどを転々としたがいずれも長続きしなかった。マッチングアプリで知り合ったミルキの家に転がり込んでからは週に一、二度スーパーのバイトをしているものの、あとはヒモ同然の生活を送っている。

ヒモの作法は、相手に自分を飼わせてやることだ。稼ぎにしても生活能力にしても、自立に足りると思わせてはならない。家畜のような従順さと野生の暴力性を同居させる必要がある。それが果たせるのは相応の容姿と性的能力、生存本能を兼ね備えた者だけだ。

スロクは有資格者だったらしい。

最寄り駅の前まで歩いたところで見当たったコンビニに入り、パックの日本酒を買い足した。高架下の、剥げかかったグラフィティで溢れるトンネルを抜け、ストローを啜める。

ミルキは八歳も年下で、手首にためらい傷が絶えない。情緒の昇降も強かで、声が嗄れるのも構わずにがなり立てる日もあれば、理由もなくどろどろと泣き続ける日もある。直前まで体調と感情がはっきりしないせいで、シフト管理の緩い夜職でしか働けない、と彼女は言

う。

数日前、フードデリバリーを利用したときも荒れていた。普段は配送料が高いのもあって敬遠していたが、ネットで割安なクーポンコードを見つけたので使ってみたのだ。クリスマス直後ということもあって、ピザやチキンを注文した。その時点では、二人ともテンションが上がっていた。

数十分後にインターホンを押したのはスロクと同じ年ぐらいの男だった。背中に窮屈そうな真四角のリュック、そして胸には、まだ髪の毛が生え揃っていない赤ん坊がおさまった抱っこ紐を結びつけていた。

彼の身なりに、スロクは特に何も思わなかった。男が挙動不審な視線をあちこちさま迷わせていたり、言葉遣いが無闇にへりくだっていたりすることが気になったぐらいだ。

プラスチックの容器を手渡しているうち、男の手首がやや強く赤ん坊の頭をこすった。それまで微睡んでいた赤ん坊の目が見開いて表情がたちまち歪み、雷鳴のような泣き声が爆ぜた。

突然の事態に動きを止めると、男は両腕で赤ん坊を覆い隠すように抱えながら「申し訳ありません！」と絶叫した。「申し訳ありません、申し訳ありません」。ますます赤ん坊は甲高く泣き喚く。仕方がないので彼の手からチキンの入ったプラスチック容器をひったくり、騒音を掻き消すためにさっさと扉を閉めた。「申し訳ありません」の連呼は錠をかけてもなお微かに響き続けた。

別に怒りが湧いたわけではない。男の謝罪がスロクではなく、過去の誰かに向けられたものであることぐらいは、直感的に悟っていた。おそらく彼は、赤ん坊を連れて働いている最中、トラウマになるほど叱りつけられたことがあるのだろう。パニックを起こして周りが見えなくなり、事態を悪化させるばかりの手を打ち続けてしまうのは、スロクにも憶えのある悲劇だった。

「悪い悪いな」

そう言いながら振り返ると、一部始終を眺めていたらしいミルクがさめざめと泣いていた。溢れた涙が頬から零れてフLOORリングに滴り落ちている。無然と立ち尽くしていると彼女は声を絞った。

「あんな、してまで働かなきゃいけないの、おかしいよ」

いまいち腑に落ちない発言だった。男の境遇が特段に不幸だとは思えなかったからだ。赤ん坊を抱えてでも金を稼ぐ人間の話なんて珍しくもない。それに、仕事の辛さでいえばミル

キの方が数段上ではないか。時間にルーズでも高給を得られるのはメリットかもしれないが、そこには決して踏み越えられない道徳や矜持の隔たりがあるはずだ。

それでもスロクはミルクを慰めた。自分が関係しているわけではないおかげで、思い遣りの皮を被った言葉がいくらでも口をついて出た。それでも一度落ちた彼女のメンタルは持ち直さず、不味い夕飯を食う羽目になってしまった。

スロクは、情緒不安定なミルクが男のパニックに共感しすぎてしまったのだろう、と思った。暗に子どもが欲しいと訴えているのかもしれない、とほとんど理路のない勘繰りさえ浮かんだ。普段から避妊はしていないが、それだって彼女が低用量ピルを常用しているからこそ為せることだ。もしかしたらミルクが勝手にピルをやめて、ある日突然妊娠を告げてくるかもしれない。そのような杞憂がよぎるだけで、スロクは釈然としない怒りに苛まれるのだった。

地下へ続く階段を下りて、コンクリート床を靴で叩くようにして歩く。誰かの笑い声が耳鳴りのように顔の周りをうろついている。

劣情に忠実で、大抵の修羅場を暴力で乗り越えてきたスロクが今日まで捕まらずに済んでいるのは単なる偶然である。意図して切り抜けたことなど一度もなく、大抵の物事は興奮がしぼむ頃には済んでしまっただけで、あとは孤独と自責だけが残っている。その自責は、自分のしていることが社会的に許されない悪行であると自覚しているが故に沸き起こるのだ。

正当な手段を行使するには才覚も理性も足りていない。他人が勧めてくる所作は、全てスロクに白旗を揚げさせるか、或いは撤退を促すものだった。要するに、頭が悪いのだから観念しろ、というのだ。承服できるだけの寛大さは、常人ならばごく普通に持ち合わせているのだろうか。そうやって矛をおさめたままで、どうやって口だけ達者な連中をやり込めればいいのか。どうやって女を抱けばいいのか。そんな考え方にも、かつてはイツカクという心強い賛同者がいたのだが。

何より欠けているのは努力の才覚かもしれない。教育や自己啓発の動画を眺めていると、その場では呑み込めてもいつの間にか脳から去っていく。サルでもわかると標榜するマンガですら読みこなせないのだからサル以下だと言われているようなものだ。車の顔つきなら区別できるが言って良いことと悪いことの区別がつかない。長期的な人間関係の構築もままならず、気付かないうちに友人知人も減らしている。

両親も既に消えている。父親はスロクが高校三年のときにアルコール依存症を患い、長年勤めていた小さな食品工場を辞め、挙げ句の果てには生活保護を頼るようになった。母親はそんな旦那を見限って家を出た。その後どうなったか直接伝えられてはいないが、一度、ヤクザくずれの男と同棲しているというような話を聞き及んだことがある。

男どもがこれ以上ない出来損ないだったから放り出すのにもためらいはなかっただろう、と十八歳のスロクは父親も纏めて自嘲した。両親への愛着がなかったとは言わない。しかし向こうが拒否するなら引っ込めるしかない。

スロクが働き出して安アパートへ転居したあと、父親はますます身持ちを崩していった。ある日の起き抜けにぶっ倒れたらしいが誰にも見つけてもらえず、そのまま溶けて畳のシミと化した。管理会社からクレームじみた訃報を聞いて、これで身軽になったと喜んだものだった。

のぼり坂に差し掛かった。いつかどこかで出会ったはずの、白髪まみれの女が、猫の断末魔みたいな音をたてて嘔吐しながら野垂れている。

スロクは自らをバカだとは思っていない。どちらかといえば愚か者であると自認している。手先の不器用さ、思考を言語化する速度の遅さ、怠惰、激情、職歴、自己嫌悪を鏡映しにした敵意……そういった日々の垢が積もった結果、必要以上に他者から貶められる存在に墮してしまっているのだろう。自分の日常や前歴を顧みれば愚かしいことには違いないが、それでも無思考だと見られるのは我慢ならない。頭を回すだけなら簡単な話だ。現に鬱々とした思考は永久機関のように蠕動し続け、虚ろな怒りを供給し続けている。

もっとも、世間からしてみればバカより愚か者の方が迷惑だろう。それぐらいは重々承知している。別に望んでいるつもりはないが、結果的に迷惑をかけているという自覚はある。ただ生きていくだけでどうしようもなく、疎まれる臭いを振り撒いてしまうのだ。

どうすればこの臭いを取り払えるのだろう。そのような自嘲めいた疑問が、いつだって前触れもなく鎌首をもたげてくる。幼い頃、学習塾に通っていなかったからか。両親の悪いところを遺伝したからか。医者が見逃していただけで、本当は何か障害があるのではないか。

原因を見つけたって癒やされるわけではない。しかしヒントすらないというのはあまりに不公平すぎる気がした。そのくせ世間というヤツは解答を求めてくる。答えを拒否しようとも、答えたことにさせられる……生き様という形で。

人々が皆、暴力の衝動を抑えて生きていくには見えない。スロクに宿った暴力性は特段に鋭利なものであるはずなのだ。

ミルキがいない夜にスマホを手繰っているうち、『アスペルガー』を紹介する解説動画に突き当たった。病名の方ではなく元ネタとなった小児科医を取り上げた、広告収入目的の粗悪品だ。

ドイツ生まれのハンス・アスペルガーはナチスの統治下において、極端に社交性を欠いた子どもたちに特殊な形質を見出し、その能力を開花させることに尽力した。手の施しようがないと思われ、疎外されていた幼い患者に希望と未来を与えたのだ。

ただし、実際には影の部分もあったらしい。数多の患者の中には、アスペルガーでさえ持て余す子どもたちが少なからず存在していたのだ。そして彼は更生不能と診断した子らを容赦しなかった。不適合の烙印を押されたどうしようもない問題児は入院病棟に送られた。そこで待っていたのは治療ではなく、安楽死という名の処刑であったのだ。第二次世界大戦のさなか、子どもたちは薬剤を注射されるか、或いは放置による飢餓で死んでいった。

アスペルガーなら、まだガキだった俺をどうしただろう、とスロクは考えた。社会に適合できず、かといって群を抜く才能など何もない。矯正教育でさえ拒絶していただろうから、どうせ不要品扱いで始末されていたはずだ。

ナチスが虐殺したのはユダヤ人や心身障害者だけではない。同性愛者や浮浪者、累犯者にとどまらず、労働を忌避する怠け者さえも反社会分子としてガス室に送り、薬殺を実施していた。あの日あの場所の価値観では、スロクのような人格は遅からず抹消される宿命にあったのだ。

平和な時代に生まれてよかったのだろう。少なくとも不当に処刑される心配はない。その代わり、不当に生きているという自責の念と一生付き合っていかなければならないが。

乳白色の霧が揺らめいている山の麓に辿りついた。禿げ上がった中年の男が肌荒れの目立つスープ嬢に、コンドームを外していいか懇願している脇を横切った。

ミルキの趣味は小説を書くことだ。食い扶持にするつもりはないようで、ただネット上に掲載しているだけである。本人の言では純文学を書いているそうだが、スロクにジャンルの違いがわかるはずもなかった。そもそも、プロの小説でさえ二十年近くも手をつけていないのだ。かといって頭から拒絶してしまっただけは具合が悪いので精一杯読んでいるふりをし、何



にでも当て嵌まるような褒め言葉を並べてやっている。あからさまなお世辞はバレているかもしれないが、表面上は笑顔を浮かべているので問題ないだろう。

彼女はスロクの本性を理解しようと努めている。いや、理想的な本性を嵌め込もうとしているのかもしれない。

「あなたは生きづらい人だから」頬を張って足蹴にした翌日、しおらしく謝罪してみせたスロクに向かって痣まみれの彼女はそう論じた。「本当のあなたはそんなのじゃないよ。私は知ってる。いつかまともになるって信じてるから」

ミルキの御高説はスロクの脳裏を素通りしていく。考え方が変わるどころか、ますます強硬に固着していく。お前に俺の本当がわかるものか。本当の俺は殴る俺だ。殴る俺は、お前にとってはずっとまともじゃないんだな。皆がそう言う。お前も皆と同じだ。

生きづらいと決めつけられても実感は湧いてこない。誰かの脳味噌を覗いたためしなど一度もないから、生き様に感じる苦しさの度合いがどれほどのものか測りきれないのだ。自分でもはっきりしないのに、ミルキは何を知ったような風で俺を慰めているのだろう。他人の性向を決めてかかるようなヤツが書く小説など、どうせつまらない自己満足に違いない。いちいち癪に障る言葉を浴びせられるたび。心臓から指先に向かって加虐の衝動が走る。ヒモらしい殊勝な態度を貫き通すことができるときもあるが、自分では制御できない憤激の波濤に身を任せてしまうときもある。

スロクだってミルキを愛しているのだ。とはいえ、その愛は自己愛を上回るほどのものではない。彼女にしてやれる最大級の奉仕が、自分みたいな将来性のない男から解き放つことだと理解しているのに、我が身可愛さに負けて実行に移せないのだった。

手持ちの酒が尽きた。道端で、高価そうなスーツと腕時計を纏った精悍な男と、同じく瀟洒なジャケットとタイトスカートを身につけた端整な女が、寄り添って首を吊っていた。

月の初め、スロクは四十一の主婦を抱いた。ソーシャルゲームで知り合って愚痴を聞いているうちに会う流れになり、あとはいつも通りアルコールで潰してホテルに連れ込んだ。薬も準備していたが、必要なかった。女は最初、三十五だと自称していたが、酔いが回り出すと本当は三十九だとやや恥ずかしげに言いだした。しかしホテルで女の外套から財布の金を抜き出すとき、ついでに免許証を見ると四十一だった。スロクにしてみればどれが真実でも大して変わりがない。しかしそういう奇妙な矜持には共感できなかつた。

合流した直後から胸糞悪い女だった。一時間経っても二時間経っても、延々と単身赴任で僻地に飛ばされた旦那を悪し様に罵り続けていた。訊いたわけでもないのに子どもがいることや、今夜は実家で面倒を見てもらっていることを明かした。病歴と経験人数と勤め先まで平気で口にした。スロクは苗字すら嘘で通したのに、彼女は全てのプロフィールを自ら暴露したのだった。シヨルダーバッグに雑然と放り込まれていた定期入れやピルケースは、女の言がほぼほぼ真実であると証明していた。

財布をあらため、彼女が普段どれだけの金を持ち歩いているか、建前としてどの程度サバを読むのかを知った。番地やマンションの部屋番号をスマホで検索して間取りを把握し、臓器移植の意思まで頭に叩き込んだ。それからベッドで朦朧と項垂れている女を犯した。性欲と支配欲と、隅々まで知り尽くした相手であるという全能感がないまぜになった性交は格別だ。目の前の撓んだ肉体を抱いているというより、一人の人間の精神を直接手込めに入っているようだった。

翌朝、まだ微睡みに溺れている女をタクシーに乗せてやった。帰り道、あらゆるアプリから女のアカウントをブロックしながら、これだからこの性根はやめられない、と思った。たださえ取り柄のない男が甘美を得るにはこうするしかない。何も学ばず、何も誇れない寄生虫が欲望に忠実でいるにはこうするしかない。柔らかく弱々しく立ち回る優男になったって決して報われないのだ。誰だって他人を傷つけて生きているのだから、自分も世に倣ってそうするべきだ。人である限りは誰かの上に立ちたがるのは本能だろう。二度と会わない女を犯しているとき、微かながら、自分が勝っていると確かめられる。それを嘔み締める作業こそが、一生のあいだで得られる最大の快楽ではないか。

酔いと不眠で焼き切れた思考回路は、どこまでも自意識を肯定してくれた。陶酔は、夜勤明けのミルクが満身創痍で帰ってくるまで、延々とスロクを甘やかし続けてくれた。

黄色く舗装された山道をのぼっていると暗い雨が降り始めた。カーキ色の作業服を身につけた、背の低い戦車の一団がとぼとぼくだつていくのとすれ違った。彼らが一様に砲塔を失ってしまったのに気付いた瞬間、酷い勢いで涙が溢れ出した。

「しかし俺……みたいなの」『福祉』について聞かされたスロクはイツカクの前で言い淀む。本当は俺たち、と言いたかったが、もはや彼は同類ではない。「碌でなしを救う場所に、『福祉』なんて名付けちゃあ、怒られるんじゃないか」

「そんなはずはないさ。現代人の言葉遣いが間違っているだけで、福祉つつうのは元々が碌でなしを救う仕組みなわけだな」いったい何がイツカクを熱心に喋らせているのだろう。饒舌の聴き心地は悪くないが、二日酔いにも似た不快感が伴っているのも事実だ。「たとえば、殴る者と殴られる者がいたとして、これはもう圧倒的に殴る者が弱者なわけさ。なんだから、殴られることなんか誰にだってできるけれども、殴るのは社会のルールから零れ落ちなきやできないんだから。で、この国じゃあ大抵の場合、殴っちまったらきっちり決まったペナルティが待っている、法律的にも、社会的にも。それでも殴っちまうというのが、弱さでなければなんだって言うんだい。福祉がまともに生きられねえのを助けるのは当然の話だろ」

「そんなもんかな」懸命に頭を働かせて追い縋ろうと試みる。「しかし、正しく生きてきたのに報われなかったヤツのための福祉、という風に考えるのが常識という気がするけどね」

「善人ほどそういう腑抜けた観念を押し付けたがるだろうさ。要するに感情豊かな慈善活動家にとっちゃあ、助ける相手が悪人であるというのは認められないんだな。いや、慈善活動家だけじゃない、大衆というのが往々にしてそうなんだろう。空想の中にしか存在しないような覇気のない、従順な生き物にしか手を差し伸べたくないってのが本音よ。まあ個人的な理想にとどまるなら構わないけどさ。しかしそりゃあ、あくまで慈善であって福祉ではないわけで。誰からも施されず、掬う手から零れた者に与えられるのが、本来の福祉つてもな」

「じゃあ、つまり」午前三時とは思えない威勢で身を乗り出した。どうして自分が息巻いているのか、スロクにはわからなかった。それほどもだに、施されたかったのだろうか。「つまり、俺みたいなクズが救われたっていいって言うんだな」

「そもそも福祉ってのはさ、高々報われない程度の人間ならば押し並べて救い終えたあとに湧き上がってくるべき概念なのさ。それを大して救えもしない時点から持ち出すのは、あの種の成功者や組織が美德を示すためのポージングに過ぎないんだな」

スロクはもう聞いていなかった。両親でなく、ミルクでなく、イツカクの言うことなら信じられた。そんな彼が放った甘言はアルコールの染みた脳を抱きしめて離さなかった。

当たり前に二人は泥酔していて、いつもなら記憶の一切合切を飛ばしてしまうところだったが、翌日の夕刻に目覚めたスロクの脳裏には『福祉』という言葉が、もはや楽園と同等の意味として刻みつけられていた。

長い独行の果てに、遂にスロクは『福祉』を発見した。くすんだ雑居ビルのような外観だが、目当ての施設が入居しているのは確からしい。押しボタン式の自動ドアの上に木の板が張られていて、そこに毛筆を真似た書体で『福祉』と彫り込まれている。気後れして立ち止まり、煙草に火をつけた。先端だけ灰にして取り落とし、丹念に踏み潰すのを三回繰り返した。

「ねえ」ミルキが猫なで声で言った。「あなたのことを、私の小説に書いてみるのはどうかな」

「書かれないわけがねえだろ」

スロクはたちどころに激昂していた。案の定、この女は何もわかっていないのだ、とこれまででない失望すら覚えた。スロクの何を書くのだというのだろう。暴力的な建前の内側に繊細さを隠し持つ、書き手の情欲にまみれたようなキャラクターにでもするつもりか。仮にミルキが、スロクが思うとおりの自分を描いたとしても、それはそれで不快でしかない。暴力は確かに本質であり、生きるための方法だが、矢鱈滅多に公開して同情を買えるような性質ではない。そんな現実には誰よりもスロク自身が理解している。こんな男は檻に放り込んで外から眺めておくぐらいがちょうどいい。バイオレンス映画や格闘技を好む連中は大勢居るが、実際に極道やレスラーになりたがるヤツがほとんどいないのと同じようなものだろう。誰もが腹の底では暴力の存在を認めざるを得ないし、娯楽として消費もするが、しかしリアリティをもって迫られたくはないのだ。そういう卑怯な世渡り上手に疎外され続けた果てにスロクは立っている。ミルキが書くことで損をするのは彼女ではなく、スロクなのだ。

なんとか理解を試みるミルキに、自由研究のような調子で観察され、記録されるのも気に入らないのだった。できることならビジネス街でニュース番組のインタビュアーにに応じているような、普通の理性的な男になりたい。最低でも三年は同じ職場に定着できる常識人になりたい。そういう役割を、無理せず全うできるようにしたい。しかしそういった泣き言は、確固たる意志をもって実行に移さない限り、決してスロクを変わらせない。まるで慈母のようなツラをしているこの女だって、足もとの男が卑屈な無能に成り下がってしまえば別の誰かに乗り換えるだろう。成果のない中年にできることといえば、口先で「これからの自分を見ていてくれ」なんて誓ってみせることぐらいだ。遠からず彼女がスロクを諦め、実直な相手を望めばその先には明るく平坦な道が伸びているだろう。真面目に働く人々が、市中には溢れている。若くて容貌も悪くないミルキにとっては造作もないことだ。

いつだって追い詰められているのはスロクの方だった。そのために、どこまでも粗暴でいなければならぬのだ。女と、他人と関わる手管なんて他にないのだから。

暴力を止めるために八方手を尽くそうとしても、手を伸ばせない箱に閉じ込められているようなものだ。病院に駆け込んで、人を殴らずにはいられない、性欲を抑えられない、と愚直に訴えて得られる報酬は何か。朝から晩まで横たわって肥えていくよう強制される、副作用の列記された大量の精神薬か、或いは閉鎖病棟の向こう側か、いずれ更に転がり落ちていく未来しか見えない。

スロクはこれ以上落ちぶれたくなかった。自分の立っている場所は既に崖っぷちで、あと一步でも踏み出せば奈落に墜落すると妄信して止まない。物心ついたときからずっとそうだったような気がする。痙攣のような被害妄想が、頭を蝕み続けている。

自動ドアの先には町医者の待合室のような小部屋があった。ガムテープで継ぎ接ぎされている古びたソファ、最奥に飾り気のない小さな鉄扉。右手に、コンビニのバックヤードみたいに雑然とした守衛室が設置されていて、窓口に気難しそうな眼鏡の小男が座っていた。

今宵のミルクは致命的に諦めが悪い。スロクが激怒しているのを察しているはずなのに、何やかやと正しい雑音を並べ立てて説き伏せにかかってくる。浴びせられた言葉が、おそらくは聞きかじっただけの、軽薄な正論だとわかっていても、正論であるために巧く言い返せない。まるでスロクの攻撃性を挑発しているような言動だった。

何よりの問題は、スロク自身が抱く葛藤や反駁を彼なりに、わかりやすく説明するに足る表現方法を持ち合わせていないことだった。国語力が乏しいせいで普段から心情を詳らかにできず鬱憤を溜めているし、酒を飲んだって出てくるのは本音ではなく虚勢である。そんな有様だからミルクの文才が如何ほどのものかなんて知る由もなく、だからこそ劣等感が肥大するのだ。少なくとも自分よりは表現に長けていると思いがっている……そしてその思い上がりはおそらく正解である……この女が憎らしくてたまらない。

煮え滾る憤激にはイツカクに対するコンプレックスがごちゃ混ぜになっている。自分できないことができるという点では二人とも同じだからだ。

前科者でありながら上手く折り合いをつけて生きているイツカクが絶望的に羨ましかった。叶うなら彼のように生きてみたいのだ。しかし、悪い生き方を教えてもらうのに躊躇はなくても、善い生き方を教えてもらうのは恥辱そのものだ。恥辱に甘んじると言うことはつ

まり、はつきりした敗北を認めると言うことでもある。敗者は未来永劫舐められ続ける。舐められたら終わりというのは、人生で見つけた唯一確かな教訓だ。

……だから、イツカクはコミュニティを離脱したのだろうか。娑婆に解き放たれたばかりで寄る辺がないときに、半グレの輩どもに頼ってしまえば生涯付き纏う力関係が発生する。媚びへつらい続けるだけならまだしも、こき使われてから捨てられて刑務所へ逆戻りにさせられる悲劇にもなりかねない。頭の良い彼ならそこまで見通せていただろう。

『福祉』を覚えてくれたのはイツカクだが、本人は探すつもりもないのだろうし、そもそもそうする理由がどこにもない。年端もいかないガキの頃から女を騙くらかし、脅しつけてのさばっていた男は、既に独り立ちしてしまった。どこまで変わったものか、などと世間は疑っているだろうが、スロクはもう彼が二度と戻ってこないと確信している。確信してしまっている。目の色を見ればわかる話だ。かつて爛々と照り輝いていたイツカクの双眸は、腐敗したように濁っている。大人の色である。

しかし、とスロクは勘繰らずにはいられない。本当にそれで生きていけるのだろうか。悪友と縁を切って身の丈に合った職業に従事するまでは、納得できずとも理解はできる。しかしその生活にはとんでもないストレスがかかっているはずだ。

「この歳になると、安値以外に能がない居酒屋へ誘える相手も少なくなるわな」最近のイツカクが対峙している相手は専ら安月給と孤独だ。「仕事があるだけまだマシだが、月一で風俗に行くのすら困るとはね。まあシフトが昼夜ぐちゃぐちゃのせいかな、性欲を持って余すこともなくなったんだけども」

……そうか、俺は舐められているのか。

スロクはふっとひらめいた。イツカクが旧友のうち、スロクにだけ接触するのは、アイツなら容易に見下せると踏んでいるからではないのか。スロクはイツカクの自尊心を保つための娯楽に成り下がっているのではないか。

あの男はわかっているんだ。俺ならば、いつまでも前に進まない。だから安心してバカにしていられる。そしてそれは百パーセント正しい。自分の顔を見れば明らかだ。鏡に頼らなくても見える顔を。敗北がすっかり馴染んだこの顔を。

碌に再会もしないまま余所へ引越していったくせに俺のことはよく憶えているんだな。さすがだ、畜生。クソがよ。

このような考えは、一刻も早く振り払わなければならない。それが自分のためだ。イツカクさえ敵視するようになってしまったら、いよいよ生き様に甲斐がなくなる。しかし、心の

どこかでは薄々勘づいていたのかもしれない。だからこそ今夜、スロクは『福祉』を目指したのではなかったか。

守衛はスロクを見るなり、反射的な動作で紙きれを突き出した。役所で書かされるような、住所氏名の記入欄がある書類だ。煩雑な文字列を目に入れる気になれない。

指先が震えるのを抑えながらどうにか必要な項目を書き込んで彼に返した。小声の礼を添えた。

「なあ、虚しくならんのか」滔々と説論を続けるミルキの姿にイツカクを重ね合わせたせいか、腕よりも先に口が動いていた。当然、理路整然とした反論が出てくるわけではない。理路とやらに助けられたことなど、これまでに一度もない。「身内を叩き売って、いったいどれだけの人間がそんなものを読むんだ。いくら偉そうにほざいたところで、世の中が認めているお前の価値はお前の身体だけじゃないか」

そうして、先ほどまで目を輝かせていたミルキが、顔をどす赤くして獣みたいに喚き始めたのだった。

絶叫が鼓膜を劈いた瞬間、いっそのこと彼女を殺して刑務所に入ろうかという考えが唐突に浮かび上がった。檻の中には更生のための仕組みがあると聞かされている。どれほどの効果をもたらすか定かでないが、少なくとも一人は生まれ変わった。

ミルキの首に手をかけようとした。本気で絞め殺すつもりだった。そうしなければこの絶叫の垣塙が終わらないという強迫観念にさえ駆られていた。

しかし、そんなときに限って頭の損得勘定が精緻に動くのだった。誰しもが持っている、越えてはならない一線はスロクの中にもある。それはやや一般常識とは懸け離れているが、殺人までも許容するほど狂ってはいない。何より、殺しを犯したあとの人生を考えると怖くてたまらなかつた。生来、酷い怖がりであるスロクには逮捕や服役という言葉が過剰なほど巨大に思える。畢竟、ミルキへの暴行も不均な女遊びも、日毎に変化していく現実に対する駄々だったのかもしれない。

両腕を止めて後ずさった。ミルキは吠え続けている。手詰まりになったスロクは、全てを擲つ代わりに三千五百円のファンヒーターを投げつけたのだった。ミルキの顔面に直撃させられる距離だった。しかし、それすら果たせなかつた。

守衛は一言も発さずに手で奥を示し、スロクはそれに従って扉を開けた。  
そこは楽園かガス室か？

A.

(全答正解)